梵文悲華経 第４章
――和訳と訳注（１）――

五島清隆　吹田隆徳
吹田隆道　壬生泰紀

はじめに

〈悲華経〉は大乗仏教興起の紀元前後よりもかなり時代が下った４世紀頃の成立とされる大乗経典である。本経典は、浄土を選んだ阿弥陀仏や阿閦仏などに一定の評価を与えながらも、最終的には、穢土である娑婆世界で覚りを開き、そこで苦しむ衆生たちを救済する釈迦牟尼仏（以下、釈尊）の大悲を強調し、釈尊を高く評価する。

釈迦信仰を核とする〈悲華経〉は、浄土信仰を取り込んでおり、さらにはヒンドゥー教の影響もうかがえる特異な大乗経典である。また、釈尊の過去世や現在世の伝記についても豊富に説いており、いわゆる「仏伝」という性格も有している。その内容は仏教美術で有名なガンダーラの図像群と親和性が高いことが分かっており、仏教美術研究においても重要な資料といえる（Rhi 2006 (2008)）。

また〈悲華経〉はインドのみならず東アジア仏教文化圏における釈迦信仰の担い手によって援用される経典としても知られている。たとえば、日本においても、貞慶（1155–1213年）、明恵（1173–1232年）、叡尊（1201–1290年）といった鎌倉期の名立たる学僧たちが自身の釈迦信仰あるいは舎利信仰（釈尊の遺骨への信仰）の裏付けとして本経典を用いている（成田1963、三崎1992: 288–297、末木1998: 228–254など）。さらには日本の神仏習合の思想基盤である本地垂迹説の根拠として〈悲華経〉の一節（実際は本経典にもとづく改変）

がしばしば引用される（cf. 三﨑1992: 278–287）。舎利信仰で重要となる本経典に目を付け、その権威をかりてかかる一節が作成されたという事実は、中世日本における〈悲華経〉の影響力の強さを物語っているといえる。

さて、筆者らは梵文〈悲華経〉の全訳を目指している。すでに第 1 章から第 3 章、第 6 章の下訳を終え、現在は第 4 章の翻訳をおこなっている。第 4 章は〈悲華経〉の核とも言うべき章であり、後代に与えた影響も大きい。それにもかかわらず、他章と比べて分量が多いこともあって、部分的にしか現代語訳が公表されていない。

本稿では第 4 章冒頭の「アラネーミン王授記物語」の梵文和訳をおこなう。アラネーミン王は本経典で阿弥陀仏の本生とされる人物である。当該箇所ではアラネーミン王が師仏（ラトナガルバ如来）の前で自身の誓願を述べ、阿弥陀仏となることを授記される。その誓願は、〈無量寿経〉所説の阿弥陀仏の本願と共通する部分が多く、阿弥陀信仰を見ていく上でも重要な箇所といえる。

悲華経のテキスト

現存する完本は下記の 4 本である[1)]。

1. 梵文 *Karuṇāpuṇḍarīka*（＝**KarP**）
2. 蔵訳 *'Phags pa snying rje pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*（＝**Tib**）
3. 漢訳『悲華経』10巻，曇無讖訳（419年）（＝**Ch1**）
   『大乗悲分陀利経』8 巻，失訳（4 世紀後半― 5 世紀前半）（＝**Ch2**）

〈悲華経〉諸本の対応関係について見ると、梵文と蔵訳、ならびに『大乗悲分陀利経』の 3 本はよく一致する。一方、『悲華経』は、他の諸本と比べてい

1）以上の計 4 種の完本の写本・版本および刊本などの詳細な情報については石上和敬氏による整理・紹介があるのでそちらを参照されたい（石上2009、2014）。またシルヴァン・レヴィ氏によって〈悲華経〉の登場人物と同じ名前が見られるトカラ語写本の存在が指摘されている（Lévi 1912）。

くぶん増広されている可能性がある。また、梵文の第1章は蔵訳ならびに『悲華経』『大乗悲分陀利経』と一致しない部分がある。

また〈悲華経〉と関連するものとして *Mahajjātakamālā*（MJM）という文献がある。MJMは、先行する文献を集大成・編纂したもので、韻文からなる仏教説話集である[2)]。時代の開きや文書形式の相違から逐語的に一致するわけではないが、全50章のうち第10章から第42章が梵文〈悲華経〉とよく対応している（cf. Yamada 1968 [I]: 117 fn. 4, Hahn 1985）。そのため、〈悲華経〉研究の補助的テキストとなる。

悲華経の構成

梵文〈悲華経〉は全6章からなる。蔵訳と『悲華経』も同様である。『大乗悲分陀利経』のみが全30章からなるものの、先述したように、内容は梵文とほぼ一致する[3)]。以下では梵文の構成にしたがい、〈悲華経〉のあらすじを紹介する[4)]。

ラトナヴァイローチャナ（Ratnavairocana）菩薩が釈尊の会座において、パドモーッタラ（Padmottara）仏について尋ねるところから始まる。釈尊はそれに応えて、パドモーッタラ仏とその国土について説き明かす（**第1章・第2章**）。

つづいて、釈尊はシャーンティマティ（Śāntimati）菩薩に「なぜ五濁を離れた清浄な仏国土を選び取らないのか」と問われ、それに対して「誓願によって」であると答えて、以下のようなはるか昔の出来事を語り出す。往古、アラネーミン（Araṇemin）という名の転輪聖王がおり、その臣下にサムドラレーヌ（Samudrareṇu）という名の婆羅門がいた。かの婆羅門には息子がおり、その子はラトナガルバ（Ratnagarbha）という如来となった。このラトナガルバ

2）岡野潔氏は、MJMは17世紀にネワール仏教徒のJyamuni（最古写本の筆写者）によって制作された作品であると指摘する（岡野2021）。
3）山田一止氏による梵蔵漢の各セクションの対照表がある（Yamada 1968 [I]: 59–62）。
4）山田氏による梵文〈悲華経〉の英文要約がある（Yamada 1968 [I]: 63–120）。

如来や聖衆を供養し、再び人天に生まれようとしていたアラネーミン王やその王子たちは、サムドラレーヌ婆羅門の鼓舞によって覚りに心を向ける。彼らはラトナガルバ如来の光によって示現された種々の仏国土を見て、清浄な仏国土を選び取ることを決め、自らの誓願について思索すること7年、再びラトナガルバ如来のもとへと集合する（**第3章**）。

かれらはそれぞれ7年間考え抜いた誓願を述べる。その誓願を聞いた如来は、それぞれに授記をする。アラネーミン王には、将来、スカーヴァティー（Sukhāvatī）世界においてアミターユス（Amitāyus）仏になると授記する。つづいて1000人の王子たちにも、未来世に仏になると授記する。その際には、アヴァローキテーシュヴァラ（Avalokiteśvara）、マハースターマプラープタ（Mahāsthāmaprāpta）、マンジュシュリー（Mañjuśrī）、サマンタバドラ（Samantabhadra）、アクショーブヤ（Akṣobhya）などの著名な尊格の名前が与えられる。

かれらが清浄な仏国土を選び取る一方で、サムドラレーヌ婆羅門の息子80人と弟子3億人は不浄な仏国土を選び取る。しかし、かれらも、ヴァーユヴィシュヌ（Vāyuviṣṇu）を除いては、貪・瞋・痴の少ない時代を選ぶ者であった。そのようなかれらに対し、サムドラレーヌ婆羅門は、五濁の世の不浄な仏国土を選び取り、そこに生きる衆生を救おうとして誓願を立てる。これがいわゆる「釈迦五百誓願」である。その誓願は仏伝的な内容で、さらには般涅槃後の舎利による救済も誓われている。それを聞いたラトナガルバ如来はかれを讃え、マハーカールニカ（Mahākāruṇika）菩薩と呼び、将来、サハー（Sahā）世界においてシャーキャムニ（Śākyamuni）という仏になると授記する（**第4章**）。

その後、ラトナガルバ如来は、マハーカールニカ菩薩の三昧門や資糧に関する問いに応じた説法をする。そして、この如来が般涅槃した後、マハーカールニカ菩薩は様々な生を受けて檀波羅蜜を完成させる（**第5章**）。

話は現在世にもどり、釈尊はシャーンティマティ菩薩に、十方の仏たちが自らの鼓舞によって無上なる正等覚に向けて心を発こしたことを告げる。さらに、この「偉大なる授記」という経の名前と受持について尋ねたヴァイシャーラド

ゥヤサムッダーラニ（Vaiśāradyasamuddhāraṇi）菩薩には、この教えの10種類の名前と、これを受持することによる利益を告げる。そして、メールプニヤ（Merupuṇya）という夜叉仙にこの教えを付嘱して、この経典が終わる（**第6章**）。

梵文〈悲華経〉の現代語訳

梵文〈悲華経〉の翻訳研究について一瞥しておく[5]。Royal W. Weiler 氏による第1章と第2章の英訳（Weiler 1956: 117–186）、宇治谷祐顕氏による第3章の和訳（宇治谷1969［附録］: 1–54）、Terakawa Shunsho 氏による第5章と第6章の英訳（Terakawa 1969: 178–307）が存在する。そして、近年、石上氏によって、第4章の一部である、いわゆる「釈迦五百誓願」の梵蔵漢対照テキストの作成と訳注研究がおこなわれた。これは同氏の東京大学への学位請求論文（「〈悲華経〉の研究――釈迦五百誓願を中心として――[6]」）の資料編である。また岩本裕氏による第1章から第4章までの抄訳もある（岩本1974）。本稿で扱う第4章の「アラネーミン王授記物語」についても、同氏の現代語訳に含まれている。ただし、必ずしも梵文に忠実な訳ではないため、新たに翻訳する意義は十分にあると言える[7]。

「アラネーミン王授記物語」のあらすじ

1. 導入部（KarP 105.2-106.3, cf. Tib(P) 194b6-195a6; (D) 169b5-170a4, Ch1 (T157) 183b20-c3, Ch2(T158) 249b11-22）

ラトナガルバ如来は、サムドラレーヌ婆羅門が鼓舞した人々に授記し、諸仏

5）〈悲華経〉の研究史については石上氏の整理・紹介があるので、そちらを参照されたい（石上2010）。

6）未刊行の論文である。Cf. http://www.l.u-tokyo.ac.jp/postgraduate/database/2011/858.html.

7）また誓願部分に限って言えば、宇治谷氏や長島尚道氏による梵文和訳が存在する（宇治谷1969: 74–109, 長島1981: 30–34）。また清水俊史氏によって、アラネーミン授記物語に対応する MJM の偈文の和訳が公表されている（清水2017: 250–255）。

国土を見せようと考えて三昧に入る。その三昧中に放たれた光を見て、アラネーミン王たちの誓願を聴くために、菩薩たちが参集する。そしてサムドラレーヌ婆羅門の指示を受け、アラネーミン王自らが、これまでの経緯と思案した誓願を述べる。

2. アラネーミン王の誓願（KarP 106.3-112.11, cf. Tib(P) 195a6-198b3; (D) 170a4-173a2, Ch1(T157) 183c3-184c16, Ch2(T158) 249b22-250b15）

まず自身の仏国土やそこにいる衆生に関する誓願が述べられる。つづいて、自身が具えるべき仏の徳性、自身の仏国土への往生方法、往生後の様子に関する誓願が語られる。また後半では、他方仏国土にいる衆生が自身の名前を聞くことで得られる利益に関する誓願も語られる。

3. 授記（KarP 112.12-114.17, cf. Tib(P) 198b3-199b6; (D) 173a2-174a3, Ch1 (T157) 184c16-185a25, Ch2(T158) 250b15-c16）

以上の誓願を受けて、ラトナガルバ如来はアラネーミン王を讃歎し、かれの誓願に相応しい仏国土を示し、その仏国土の系譜について語り出す。そして、その世界が後にスカーヴァティーと呼ばれ、アラネーミン王がアミターユスという仏になると授記する。

4. 自身に先行する仏たち（KarP 114.18-115.14, cf. Tib(P) 199b6-200a5; (D) 174a3-b1, Ch1(T157) 185a25-b7, Ch2(T158) 250c16-27）

アラネーミン王は、将来のスカーヴァティー世界となる仏国土で、自身より先に仏となる者たちが今どこにいるのかをラトナガルバ如来に問う。そして、如来は、今面前に十方から集まって来た菩薩たちが先に仏となる者たちであると明かす。

5. サムドラレーヌ婆羅門が成仏する時期（KarP 115.14-19, cf. Tib(P) 200a5-7; (D) 174b1-3, Ch1(T157) 185b8-12, Ch2(T158) 250c27-251a1）

つづいて、アラネーミン王はサムドラレーヌ婆羅門の成仏する時期を問う。

ラトナガルバ如来は、その時期については明言せず、かれが大悲をもつ者（mahākāruṇika）であり、将来、王自身がかれの獅子吼を聞いて知るであろうと答える。

6. 誓願成就の証明（KarP 115.20-116.18, cf. Tib(P) 200a7-b7; (D) 174b3-175a2, Ch1(T157) 185b12-26, Ch2(T158) 251a1-13）

アラネーミン王は、如来が授記した通りに誓願が成就する証明を望む。すると、諸仏国土が震動する奇瑞が起こり、諸仏もまたラトナガルバ如来と同様にかれに授記する。

7. ラトナガルバ如来の鼓舞（KarP 116.19-117.7, cf. Tib(P) 200b7-201a1; (D) 175a2-3, Ch1(T157) 185b26-c4, Ch2(T158) 251a14-18）

如来に授記され、鼓舞されたアラネーミン王は歓喜し、如来の前から退いて一隅に坐す。

阿弥陀仏の本願の対照表

先述したように当該箇所に見られるアラネーミン王の誓願は、無量寿経所説の阿弥陀仏の本願と共通するものが多い。また、MJM の§10（Hahn 1985: 163–166）にも対応する誓願が確認される。そこで、それらを把握できるよう対照表を以下に示す。対照表には、KarP を基準に据えて、梵文〈無量寿経〉（L.Sukh）と『無量寿経』（T360）、MJM の 3 本を対照させる。KarP の願数は本稿で付した誓願の通し番号を、L.Sukh と T360は願数を、MJM は偈頌番号を記す。なお、対照表の作成にあたっては、宇治谷氏と清水氏の成果を参考にした（宇治谷1969: 51–56, 111–115，清水2017: 256–258）。

KarP	L.Sukh	T360	MJM (§10)
1	1	1	643–644
2	2	2	645
3	3	3	—

KarP	L.Sukh	T360	MJM (§10)
4	4	4	—
5	6	5	647
6	7	6	647
7	8	7	647
8	9	8	647
9	5	9	647
10	10	10	648
11	11	11	649?
12	—	—	651
13	14	15	652–653
14	16	16	654
15	—	—	655
16	20	21	656
17	21	22	—
18	22	23	657–658
19	24	25	658
20	26	26	—
21	27	27	—
22	29	29	659
23	28?	28?	—
24	30?	31?	661?
25	—	36	665
26	36	37	672
27	40	41	661?
28	33, 38?	33, 39?	663?
29	43	44	—
30	37	38	660
31	41, 44?	42, 45?	662?
32	39	40	—
33	41?	41?	662?
34	—	—	—
35	—	—	—
36	—	—	663?
37	—	—	663
38	28?	28?	667
39	13	12	668
40	15	13	668
41	12?	14?	668–669
42	17	17	670
43	19	18, 20	671

KarP	L.Sukh	T360	MJM (§10)
44	18	19	672?, 676
45	—	—	673
46	34, 47	34, 48	650?, 673–674
47	17?, 43	17?, 44	675, 677?
48	34?, 47?	34?, 48?	650?, 674?
49	35	35	678
50	35	35	678

凡例

・和訳に際してはKarPを底本とし、他の資料（Tib, Ch1, Ch2）を参照した。
・底本の頁数は［ ］で示す。
・和訳の会話文は全体を字下げした文章で示す。
・諸本の参照により、底本の読みを訂正して読む場合もあるが、できる限り底本を重んじ、訂正は最低限にとどめる。訂正した部分は後に一覧にしてある。
・諸本の間で著しい異同が見られる場合には注記し、内容の理解を容易にするために必要な場合には〈無量寿経〉を参照する。

和訳と訳注

1. 導入部

［105］さて、善男子よ、ラトナガルバ如来・応供・正等覚者には次のような思いが浮かんだ。

かのサムドラレーヌ婆羅門が、コーティーもの多くの[8]民衆を無上なる正等覚に向けて鼓舞し、傾倒させ、確立させ、不退転の地に立たせた。そして、私はその者たちに授記すべきであり、諸仏国土を見せるべきである。

そこで、世尊は、ボーディチッタアサムプラモーシャという三昧[9]に入った。

8）KarP（105.3）に bahyo とあるのを bahvyo と訂正して読む。
9）Skt: bodhicittāsaṃpramoṣa, Tib: byang chub kyi sems mi brjed pa, Ch1: 不失菩提心 , Ch2: 不忘菩提心 .

そして笑みを浮かべた。［世尊が］笑みを浮かべたことにより、無辺で無限の[10]仏国土が広大な輝きによって照らされ、アラネーミン王やその他の多くの民衆に仏国土にある特性の配置を見せた。

さらにその時、十方の数え切れない仏国土にいる菩薩摩訶薩たちは、その輝きを見て、仏の威力によって、世尊と比丘の集団にまみえ、礼拝し、恭敬するために、この世界に集まった。そして、種々な菩薩の神変でもって世尊への供養をおこない、［世尊の］両足に頭でもって礼拝して、世尊を恭敬してから、菩薩たちの誓願を聞きたいと思って、かれらは［世尊の］前に座った。

［106］さて、善男子よ、主席祭官サムドラレーヌ婆羅門はアラネーミン王に言った。

偉大な王よ、まず最初にあなたが仏国土の特性の配置を選び取ってください。

2. アラネーミン王の誓願

そこで、アラネーミン王は世尊のいる方に向かって合掌し、世尊に次のように言った。

世尊よ、私は覚りを求める者です。私は3ヶ月のあいだ、様々な種類の資財でもって、世尊と無量の比丘の集団に仕え、その善根を私は無上なる正等覚に回向しました。そして、世尊よ、この7年のあいだ、私は仏国土の特性の配置を考えました。世尊よ、私が無上なる正等覚をさとった仏国土、

（1）そこに[11]地獄・畜生・ヤマの世界がありませんように。

（2）そして、衆生たちが［そこから］死没しても、かれらが悪趣に生まれませんように。

（3）そこにいるすべての衆生は金色になりますように。

（4）そこにいるすべての天と人に違いがありませんように。

10）KarP（105.9）に anantā paryantā とあるのを anantāparyantā と訂正して読む。

11）KarP（106.11）に yatra とあるのを tatra と訂正して読む（cf. KarP 106 fn.2）。

（5）そこにいるすべての衆生が［前の］生涯の記憶（宿命）をもっていますように。

（6）そして、すべての衆生が、百千コーティー・ニユタもの仏が他の諸世界にとどまり、時を過ごし、教えを説いているのを見ることができる、そのような天眼を具えますように。

（7）そして、すべての衆生が、百千コーティー・ニユタもの仏が教えを説いているのを [107] 聞くことができる、そのような天耳を具えますように。

（8）そして、すべての衆生が、百千コーティー・ナユタもの多くの仏国土にいる、かれら衆生たちの心の動きを知ることができる、そのような他心智を具えますように。

（9）すべての衆生が、一つの心が起こる［ほどの瞬間］で、百千コーティー・ニユタもの仏国土を越えることができる、そのような巧みな神通力（神足）[12] を具えますように。

（10）そして、そこにいる衆生たちは、所有［という思い[13]］をもつ者とならず、自分の身体でさえ惜しまない心をもつほど［になりますように］。

（11）そして、すべての衆生は無上なる正等覚に対して退かない者となりますように。

（12）そして、すべての衆生は化生した者でありますように。そこには女性と知らしめるものはありませんように[14]。

12）KarP（107.4）に -vidhena rddhi- とあるのを -vidhenarddhi- と訂正して読む。

13）KarP（107.6）に parigrahavanto とあるが、L.Sukh（16.17, 第10願）に「所有の思いが起こるようなら」（parigrahasaṃjñoupadyeta）とあるのを参照して補う。

14）従来の研究では等一化生と無有女人を分けて2つの願と見るが（cf. 宇治谷1969: 66–67, 80–81）、本訳ではこれらを1つの願と見る。それは、すべての衆生が化生であり、本来であれば母体となるべき女性がいないことを関連させて説いたものと理解してである。両者に関連性のあることは、これより後に語られるラトナガルバ如来の言葉（cf. KarP 113.3–4）にも一連のものとして説かれている点からも知ることができる。また、実際に等一化生と無有女人を1つの願と理解している例として『大阿弥陀経』第二願（T362, 301a27–b3）を挙げることができる。

（13）そこでは、誓願による［死没の］場合は別として、衆生たちの寿命の量に限りがありませんように。

（14）そこにいる衆生たちには不善にあたる名称すらありませんように。

（15）そこには悪臭がなく、天上［の香り］をも超える幸ある香りによってその仏国土が満たされますように。

（16）そして、すべての衆生は偉大な人のもつ三十二相で飾られていますように。

（17）すべての衆生は、誓願［によって生存をくり返す場合］を除いて、一生補処の者でありますように。

（18）そこにいる衆生たちは、一［日の］午前中に仏の威力によって数え切れない［ほどの数の］仏を恭敬し、乃至、種々な菩薩の神変でもって仏への供養をおこなうことを望むであろうが、まさしく［望む］通りにそれらを成就することができ、まさにその［日の］食事前[15]に［本土に］戻ってくることができますように。

（19）[108] そして、すべての衆生が仏蔵[16]を語りますように[17]。

（20）そして、すべての衆生がナーラーヤナの力を具えますように。

（21）いかなる衆生も、仏国土の特性[18]の装飾がもつ色彩の限度を、天眼によってすら、把握することができませんように。

（22）そこにいるすべての衆生は［四］無礙を得て、無数の弁才をもつ者[19]となりますように。

（23）そして、菩薩ひとり一人には千ヨージャナの大きさ[20]がありますよ

---

15)「食事前」（pūrvabhakta）について、Tib は snga dro、Ch1と Ch2は共に「食頃」とする。L.Sukh（19.5, 第22願）では purobhakta という語で説かれている（cf. 藤田2015: 214–215）。

16) Skt: buddhapiṭaka, Tib: sangs rgyas kyi sde snod, Ch1: 仏之法蔵 , Ch2: 仏蔵 .

17)「仏蔵を語る」（buddhapiṭakaṃ kathayeyuḥ）ということについて、L.Sukh（19.21–22, 第24願）を参照すると「一切智者性を伴った法の話を語らないなら」（na sarvajñatāsahagatāṃ dharmāṃ kathāṃ* kathayeyur）とある。* dharmāṃ kathāṃ は dharmakathāṃ として読む。

18)「特性」（guṇa）相当の語は Ch1と Ch2には見られない（Ch1: 所有荘厳之事 , Ch2: 其仏土中荘厳）。

19)「無数の弁才」（asaṃkhyeyapratibhāna）相当の語は Ch1には見られない（Ch1: 皆得四弁 , cf. 宇治谷1969: 110）。

うに。

(24) その仏国土が浄らかに輝きますように。そして、周囲の数え切れないほどの仏国土の特性の配置をそ［の仏国土］で見ることができますように。

(25) そして、そこに生まれるであろう衆生たちは、覚りの極地に至るまで梵行者でありますように。

(26) すべての衆生が天を含む世間のうちで敬意を示されるべき者でありますように。

(27) 覚りの極地に至るまで諸根を欠く者となりませんように。

(28) そして、そ［の仏国土］に生まれると同時に、衆生たちは、天上をも超える聖なる喜びと安楽を得ますように[21]。

(29) そして、そこにいるすべての衆生が善根を集める者となりますように。

(30) そして、そこにいるすべての衆生が新しい袈裟衣を着用しますように。

(31) そして、そこに生まれると同時に、衆生たちは〈スヴィバクティヴァティー[22]〉という三昧を会得し、その三昧の会得によって、数え切れないほどの仏国土に赴き、諸仏を恭敬し[23]、覚りの極地に至るまで［諸仏に］くり返しまみえますように。

---

20) KarP（108.6）には「千ヨージャナの大きさ」（yojanasahasrapramāṇaṃ）とだけ説かれる。Ch1と Ch2は共に千ヨージャナの樹（菩提樹）とするが（Ch1: 一一菩薩所坐之樹、枝葉遍満一万由旬 , Ch2: 願令一一菩提樹高千由旬）、Tib は千ヨージャナの身体（re re'i lus kyang dpag tshad stong gi tshad）とする。宇治谷（1969: 110）は Tib の理解に従って、この願が菩薩の身体の大きさが一ヨージャナあると説いたものと見る。また KarP（15.9, cf. fn. 6）にある記述から千ヨージャナの光明（prabhā）という見方もされている（cf. KarP 108 fn.3）

21) L.Sukh（23.9–10, 第38願）を参照すると、「熱悩を離れた阿羅漢の比丘が第三禅に入ったときのような［安楽］」（yathāpy nāma niṣparidāhasyārhato bhikṣos tṛtīyadhyānasamāpannasya）と説かれている。また、第三禅に楽はあっても喜はない。L.Sukh の第38願には喜は見られない。かりに Karp でも第三禅を意図しているならば、そこには存在しないはずの喜が極楽にはあることの理由として、特別な喜という意味で「聖なる喜び」としていると考えられる。

22) Skt: Suvibhaktivatī, Tib: shin tu rnam par 'byed pa dang ldan pa, Ch1: 善分別 , Ch2: 善分別 .

23) KarP（108.18）に paryupasīran とあるのを paryupāsīran と訂正して読む。

（32）そして、そこに生まれた菩薩たち、かれらが望む仏国土の特性の配置と同じ種類の［109］仏国土の特性の配置を[24]それら宝樹において見ますように[25]。

（33）そして、［そこに］生まれると同時に衆生たちは三昧を会得し、三昧の会得によって、十方における数え切れないほどの他の仏国土にとどまり、時を過ごしている諸仏を[26]常に見ますように。

（34）そこに再生するであろう衆生たち、かれらすべては、他化自在［天］の神々と同じ衣服・宮殿・装飾・装身具・いろ・かたちを具えますように。

（35）その仏国土には砂利や岩やカーラ山[27]はありませんように。チャクラヴァーダ［山］も、マハーチャクラヴァーダ［山］も、スメール［山］も、大海も［あり］ませんように。

（36）そこには「覆い」（āvaraṇa）や「妨げ」（nivaraṇa）や「煩悩」（kleśa）という音声が、いかなるあり方でも、いかなる時にも、いかなる場所にも［存在し］ませんように。

（37）そこには「地獄」（naraka）「畜生」（tiryagyoni）「ヤマの世界」（yamaloka）という音声はありませんように。「［八］難」（akṣaṇa）という音声がなく、「苦」（duḥkha）という音声がありませんように。

世尊よ、私は以上のような仏国土を求めます。大徳世尊よ、以上のような諸特性で仏国土を清浄にするまで、私は菩薩の成し難い行を実践します。

24）KarP（109.1）に -kṣetraguṇavyūhāḥ とあるのを -kṣetraguṇavyūhān と訂正して読む。

25）「宝樹において見る」（ratnavṛkṣeṣu paśyeyuḥ）について、L.Sukh（23.14–15, 第39願）を参照すると、「様々な宝樹から感知できないなら」（nānāratnavṛkṣebhyo na saṃjānīyur）としている。『無量寿経』（T360, 269a9–10）では説明が加えられ、曇りのない鏡にその顔が映って見えるように、宝樹の中において見ることができる（於宝樹中皆悉照見。猶如明鏡覩其面像）という。

26）KarP（109.4）に buddhās とあるのを buddhān と訂正して読む。

27）KarP（109.7–8）に pāṃśuśilā kālaparvatā とあるのを pāṃśuśilākālaparvatā と訂正して読む。

大徳世尊よ、私はそのような雄々しい行為をおこないます。その後に無上なる正等覚をさとります。

(38) そして、私の菩提樹は一万ヨージャナ［の高さ］でありますように。そして、私はその場所に座って、一刹那の心が起こるあいだに無上なる正等覚をさとりますように。

(39) そして、私には無量の光明がありますように。［その光明が］[110] 百千コーティー・ナユタの仏国土を照らしていますように。

(40) そして、私には無量の寿命がありますように。［その寿命は］百千コーティー・ナユタ劫ほどに無量であり、一切智者の智によるのは別として、だれも計算することはできない。

(41) そして、私には、声聞と独覚を除いた[28]無量の菩薩の集団がありますように。一切智者の智によるのは別として、そ［の集団］を［だれも］計算することはできない。

(42) そして、私が覚りを得たときに、無量無数の他の仏国土にいる諸仏世尊が、［私に対する］賛辞を述べ、そして声に出してくり返し聞かせて、名声を高めてくれますように。

(43) そして、私が覚りを得たときに、無量無数の他の仏国土で［私の］名前を聞いた衆生たち、かれらすべてが［私の］仏国土に［生まれることに］向けて善根を回向するならば、私の仏国土に生まれますように。［五］無間［業］をおこなった衆生［と］正法を誹った［衆生］を除く。

(44) 私が覚りを得たときに、数え切れないほどの他の世界にいる衆生たちが菩提心を発しますように。［かれらが］私の仏国土に生まれることを望みながら、そ［こに生まれること］に向けて善根を回向しますように。また、かれらの臨終に際して、私は菩薩の群衆

28)「声聞と独覚を除く」（śrāvakapratyekabuddhavarjita）について、Ch2のみが声聞と縁覚には数えられないとする（Ch2: 声聞縁覚無能数者）。

に取り巻かれて、［かれらの］前に立ちます。そして、かれらが私を見て、喜びと浄信を私に対して起こしますように。そして、すべての覆いとなるものを [111] 取り除きたい。そして、死後、私の仏国土に生まれますように。

(45) そこにいる菩薩たち、かれらが私のもとで、いまだかつて聞いたことがない教説を望むなら、かれらが聞きたいと望むとおり［の教説］を聞くことができますように。

(46) そして、私が覚りを得たときに、数え切れないほどの仏国土にいる、［私の］名前を聞くであろう菩薩たち、かれらが無上なる正等覚に対して退かない者となりますように。第一の忍を会得しますように。同じように第二の［忍］、［第三の忍を会得し[29]］、望むとおりの三昧と陀羅尼を会得しますように。

(47) そして、私が般涅槃して、数え切れないほどの劫の後に、数え切れないほどの仏国土にいる菩薩たちが私の名前を聞いて、最上の喜びと浄信と歓喜を得ますように。この私に敬礼しつつ、驚嘆した［かれらが私の］名声と称讃を[30]語りますように[31]。

(48) そして、菩薩となった私は、仏事をなし終えた後に、無上なる正等覚をさとります。私が［無上なる正等覚を］さとったとき、最上の浄信を会得した菩薩たちが、第一の忍を会得した者となりますように。第二の［忍］、第三の［忍を会得した者となりますように］。そして、望むとおりの三昧と陀羅尼を会得しますように。覚りの極地に至るまで［諸仏に］くり返しまみえることができますように[32]。

---

29) KarP（111.7）に第三の忍への言及はないが、Ch1ならびにCh2に第三の忍が説かれていること（Ch1: 得第一忍第二第三 , Ch2: 得第一第二第三忍）、その後の第48願（KarP 111.17）では第三の忍に言及することに鑑みて、このように補う。L.Sukh（25.13, 第47願）を参照しても「第一第二第三の忍」（prathamadvitīyatṛtīyāḥ kṣāntīḥ）と説かれている。

30) KarP（111.13）に yaśakīrtiṃ とあるのを yaśaḥ kīrtiṃ と訂正して読む。

31) 従来の研究ではこの第47願と次の第48願を合わせて聞名得忍という 1 つの願と見る（cf. 宇治谷1969: 66–67, 103–105）。本訳では、この願が第42願に見るような内容を自らの般涅槃後にも当てはめたものと理解して聞名得忍とは区別して考え、第47願として立てる。

（49）そして、私が覚りを得たときに、数え切れないほどの仏国土にいる、私の名前を [112] 聞くであろう女性たち、彼女たちが最上の喜びと歓喜［と浄信[33]］を得て、無上なる正等覚に向かう心を発してほしい。覚りの極地に至るまで、再び女性であることを得ませんように。

（50）そして、私が般涅槃して後、数え切れないほどの劫のあいだ、私の名前を聞くであろう、数え切れないほどの女性たち、彼女たちが最上の喜びと歓喜と浄信を得て、無上なる正等覚に向かう心を発してほしい。覚りの極地に至るまで、再び女性であることを得ませんように。

大徳世尊よ、私は以上のような仏国土を望みます。そして、［その仏国土の］衆生たちは、以上のように完全に浄らかな意向をもっています。世尊よ、私は以上のような仏国土において[34]無上なる正等覚をさとります。

3. 授記

すると、善男子よ、ラトナガルバ如来・応供・正等覚者はアラネーミン王に賛辞を贈った。

偉大なる王よ、すばらしい、すばらしい。汝の誓願は奥深く[35]、汝の選び取った仏国土は清浄である。

偉大なる王よ、見よ。西の方角に百千コーティーの仏国土を越えると、インドラスビラージターと呼ばれる世界がある。その場所にインドラゴー

32）KarP（111.19）には anupaśyeyuḥ とあり、Tib もこれに対応する訳語（rjes su mthong bar gyur cig）を用いている。どちらの資料にも見る対象が何であるのがが明示されていないが、第31願と第33願を参考に諸仏を対象として補った。ただし、Ch1ならびに Ch2では何かを見るという文脈とはなっていない（Ch1: 無有退失 , Ch2: 未常（→嘗）断絶）。

33）KarP（112.1）に「浄信」（prasāda）の語は見られないが、Tib の対応箇所に shin tu dga’ ba dang/ mchog tu dga’ ba dang/ dang ba thob par ’gyur とあり、次の第50願（KarP 112.6）には paramaprītipramodyaṃ prasādaṃ ca とあることに鑑みて、これを補う。

34）KarP（112.10）に īdṛśo とあるのを īdṛśe と訂正して読む。

35）KarP（112.14）に gambhīras とあるのを gambhīraṃ と訂正して読む。

シェーシュヴァララージャと呼ばれる如来・応供・正等覚者がとどまり、生存し、時を過ごし、清浄な衆生たちに教えを説いている。そして、その仏国土には声聞や独覚を [113] 知らしめるものも存在せず、そこでは［声聞と独覚に向かう心を］発すための[36]声聞と独覚の話はされず、そこでは清浄な大乗の話が［される］。衆生は、すべて、化生した者たちであり、そして、そこでは女性という名称も知られない。

この仏国土におけるこれらすべての特性は、偉大なる王が、無量の仏国土の特性の配置に関する誓願を立てた通りであり、無量の［完全に浄らかな[37]］意向をもつ衆生たちを教化されるべき者として選び取った［通りである］。

偉大なる王よ[38]、インドラゴーシェーシュヴァララージャ如来が般涅槃して後、その正法が隠没してから[39]六十中劫を過ぎると、その世界はメールプラバーと呼ばれるようになる。そ［の世界］にアチンティヤマティグナラージャという如来・応供・正等覚者が現れる。インドラゴーシェーシュヴァララージャ如来・応供・正等覚者のインドラスビラージタ世界における仏国土の特性の配置と、アチンティヤマティグナラージャ如来のメールプラバー世界における［仏国土の］特性の配置は同じとなる。

そして、かのアチンティヤマティグナラージャ如来の寿命の量は六十中劫となる。アチンティヤマティグナラージャ如来が般涅槃すると、十六中

36) KarP（113.1）にある utpādāya は難解である。今はこのように訳したが、Tib は「声聞と独覚の出現や、［声聞と独覚を］知らしめるものも存在しない」（nyan thos dang rang sangs rgyas rnams ’byung ba gdags su ’ang med ching）と訳して、問題の語を一つ前の文章に掛けて理解しており、Ch2もこれに近い理解を示す（Ch2: 無有声聞及辟支仏。亦無其名）。

37) KarP（112.10）に pariśuddāśayāḥ sattvā とあったのに鑑みて、これを補う。

38) KarP（113.6–7）に tena tvaṃ mahārāja とあるが、tena tvaṃ 相当の語が Tib に見られないことに鑑みて訳していない。Ch1ならびに Ch2を参照すると、当該箇所には王の名前を無量清浄に改めるよう述べる文章が挿入されており（Ch1: 今改汝字為無量清浄 , Ch2: 字汝為無量浄）、tena tvaṃ は本来説かれていたはずのこの文章の一部ではないかと考えられている（cf. KarP 113 fn. 2）。

39) Ch1と Ch2はインドラゴーシェーシュヴァララージャ如来が一中／小劫で涅槃し、その正法は十中／小劫世にとどまるとする（Ch1: 過一中劫当般涅槃。般涅槃已正法住世満十中劫 , Ch2: 竟一小劫当入涅槃。帝明自在王如来応供正遍知正法住世十小劫）。

劫のあいだは、か［の如来］の正法が［世に］とどまるだろう。

か［の如来］の正法が隠没してから千中劫を過ぎると、[114] その世界はヴィラティと呼ばれるようになる。そ［の世界］にラシュミという如来・応供・正等覚者が［現れる］。――前述の如く云々――。そして、［ラシュミ如来は］か［の仏たち］の寿命と同一であり、世界とも同一となる。

同様に、般涅槃した後、正法が隠没してから、その世界はアパラー[40] と呼ばれるようになる。そ［の世界］に[41] ラトネーシュヴァラゴーシャという如来が出現する。

［かの如来の］仏国土の特性の配置は［前述の仏たちと］同一であり、か［の如来］は五中劫のあいだ[42]、とどまり、時を過ごし、教えを説くだろう。

か［の如来］が般涅槃して後、七中劫のあいだ正法はとどまるだろう。そして、かの正法が隠没してから、――前述の如く云々――。このようにして、私は、その仏国土において無量無限の如来たちの出現と般涅槃とを見るが、その世界自体は壊れもしなければ消滅もしない。

それから未来世において、あるガンジス河の砂に等しい［数の］阿僧祇［劫］が過ぎ、次のガンジス河の砂に等しい［数の］阿僧祇［劫］に入ったとき[43]、その世界はスカーヴァティーと呼ばれるようになる。偉大なる王よ、汝はそ［の世界］で無上なる正等覚をさとり、アミターユスという名前の如来・応供・正等覚者となるであろう。

4. 自身に先行する仏たち

アラネーミン王は言った。

大徳世尊よ、私よりも先に、[115] その仏国土で無上なる正等覚をさとる菩薩摩訶薩たちはどこにいるのでしょうか。

---

40) Skt: aparā, Tib: rtsibs（*ara）, Ch1: 善堅（*sāra）, Ch2: 娑羅（*sāra）.

41) KarP（114.4）に tara とあるのを tatra と訂正して読む。

42) KarP（114.6）に samaṃ cāntarakalpā とあるのを sa pañcāntarakalpāṃ と訂正して読む。この訂正は Tib 対応箇所（de’ang bar gyi bskal ba lngar）と照らし合わせた上での還梵であ

世尊は言った。

偉大なる王よ、十方それぞれの無量、無数、無比、無限[44]の世界から、私に礼拝し、恭敬し、教えを聞くためにやって来て、私の前に座った、かれら菩薩摩訶薩たちがそうである。

この者たちは過去の仏たちによって無上なる正等覚［をさとること］をすでに授記されている。これらの善男子たちは現在の諸仏世尊によっても無上なる正等覚［をさとること］を授記される。［かれらは］かの仏国土において先に無上なる正等覚をさとるであろう。

偉大なる王よ、かの菩薩たちひとり一人は、百千コーティー・ナユタもの数え切れない仏のもとですでに仕えており、善根を植え、智慧を修習している。それゆえ、偉大なる王よ、かの仏国土で先に仏となるのはこれら善男子たちなのである。

5. サムドラレーヌ婆羅門が成仏する時期

アラネーミン王は言った。

大徳世尊よ、私を眷属と共に無上なる正等覚に向けて鼓舞した、かのサムドラレーヌ婆羅門は、どれほどの期間で無上なる正等覚をさとるのでしょうか。

世尊は言った。

サムドラレーヌ婆羅門は大悲をもつ者である。かれが獅子吼するので、汝は［それを］聞くであろう。

6. 誓願成就の証明

王は言った。

り、Skt 以外の資料に sama 相当の語は見られない。Ch1と Ch2は「五」（pañca）ではなく、「三十五」（pañca triṃśat）という数字を挙げる（cf. KarP 114 fn. 5）。

43) KarP（114.13）に pratiṣṭa とあるのを praviṣṭa と訂正して読む（cf. KarP 114 fn.7）。

44) KarP（115.3）にある ’prameyair asaṃkhyeyair atulyair aparimāṇair について、Tib と Ch2は世界の数と理解しており、こちらに従った。Ch1は菩薩摩訶薩の数と理解する（Ch1: 如是菩薩今在此会。其数無量不可称計）。

もし私が世尊に授記された通りに、[116] 私のこの誓願が成満するなら、私が五体投地して世尊の両足に礼拝するその時に[45]、ガンジス河の砂に等しい［数の］世界は震動し、揺れ動きますように。そして、それら仏国土にとどまり、生存し、時を過ごしている諸仏は私に授記してください。

すると、善男子よ、アラネーミン王はラトナガルバ如来の足もとに五体投地した。まさに王の頭が地面に触れたその時、ガンジス河の砂に等しい［数の］仏国土は震え、［激しく震え[46]］、揺れ、激しく揺れ、動き、激しく動いた。ガンジス河の砂に等しい［数の］諸仏は［次のように］授記した。

サンティーラナという仏国土にて、ダーラナという劫の時に、人の寿命が八万年の時に、ラトナガルバ如来・応供・正等覚者がアラネーミン王に授記した[47]。汝は未来世に向けてガンジス河の砂に等しい［数の］阿僧祇［劫］を過ぎ、次の阿僧祇［劫］に入った時、スカーヴァティーという限りなく浄らかな[48]世界において、アミターユスという如来・応供・正等覚者となるであろう。汝は十方にあるガンジス河の砂に等しい［数の］世界をあまねく照らすだろう。

7. ラトナガルバ如来の鼓舞

世尊は言った。

[117] 立ちあがれ。卓越した衆生よ、道理を知る者よ、汝は十力をもつ者たちによって授記された。

---

45) KarP（116.1）に tadyathā とあるのを tadyadā と訂正して読む。

46) Tib に rab tu ’gul（*prakampa）とあるのに鑑みて、これを補う。

47) Skt や Tib では諸仏の授記の内容が不明瞭となっている。そもそも「ラトナガルバ如来・応供・正等覚者がアラネーミン王に授記した」という一文は Ch1と Ch2には出ておらず、これらを参照する限り、諸仏の授記は、

サンティーラナという仏国土でダーラナという劫の、人間の寿命が八万歳のときに、ラトナガルバという仏が世に現れた。アラネーミンという転輪王も同じく世に現れて、ラトナガルバと比丘の集団に 3 ヶ月のあいだ供養した。その善根によって、アネーミン王は、未来にスカーヴァティーという世界で、アミターユスという仏になる。(取意)

という内容となっており、こちらの方が理解しやすい。

48) KarP（116.16）にある amitaśuddha は Ch1と Ch2ではアラネーミン王の名前として理解されている（Ch1: 有転輪聖王名無量浄 , Ch2: 彼無量浄王。cf. KarP 116 fn 5）。

ガンジス［河の水面］のように、大地は山ごと揺れ動いた。汝は人のうちで最も勝れた調御者となるであろう。

すると、善男子よ、アラネーミン王は満足し、勇躍し、歓喜し、喜びと心満たすものを生じて、［世尊の面前から］そう遠くないところに移り、教えを聞くために一隅に座った。

原文訂正一覧

KarP 105.3: bahyo → bahvyo

KarP 105.9: anantā paryantā → anantāparyantā

KarP 106.11: yatra → tatra (cf. Karp 106 fn.2)

KarP 107.4: -vidhena rddhi- → -vidhenarddhi-

KarP 108.18: paryupasīran → paryupāsīran

KarP 109.1: -kṣetraguṇavyūhāḥ → -kṣetraguṇavyūhān

KarP 109.4: buddhās → buddhān

KarP 109.7-8: pāṃśuśilā kālaparvatā → pāṃśuśilākālaparvatā

KarP 111.13: yaśakīrtiṃ → yaśaḥ kīrtiṃ

KarP 112.10: īdṛśo → īdṛśe

KarP 112.14: gambhīras → gambhīraṃ

KarP 114.4: tara → tatra

KarP 114.6: samaṃ cāntarakalpā → sa pañcāntarakalpāṃ

KarP 114.13: pratiṣṭa → praviṣṭa（cf. KarP 114 fn.7）

KarP 116.1: tadyathā → tadyadā

略号・参考文献

〈一次資料〉

Ch1:　曇無讖訳『悲華経』（T157, 167a5–233c8）.

Ch2:　失訳『大乗悲分陀利経』（T158, 233c13–289a25）.

D: 『台北版 西蔵大蔵経』.

KarP: *Karuṇāpuṇḍarīka* (Yamada 1968 [II, Part One]).

L.Sukh: *Sukhāvatīvyūha* [Larger]（藤田宏達校訂『梵文無量寿経・梵文阿弥陀経』京都：法藏館, 2011年, pp. 1–80）.

MJM: *Mahajjātakamālā* (Hanh 1985 [hauptteil]: pp. 1–721).

P: 『影印北京版 西蔵大蔵経』.

T: 『大正新脩大蔵経』.

Tib: *'Phags pa snying rje pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* (P: Vol. 29 mdo sna tshogs, cu 149a5–296b4, #780; D: Vol. 5 mdo sde, cha 129a1–297a7, #112).

〈二次資料〉

Hahn, Michael

1985 *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā): Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal*, Nach Vorarbeiten von Gudrun Bühnemann und Michael Hahn herausgegeben und eingeleitet von Michael Hahn, Asiatische Forschungen Bd. 88, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Lévi, Sylvain

1912 "Une légende du Karuṇā-Puṇḍarīka en langue tokharienne," in *Festschrift: Vilhelm Thomsen zur Vollendung des siebzigsten Lebensjahres am 25. Januar 1912 / dargebracht von Freunden und Schülern*, Leipzig: Harrassowitz, pp. 155–165.

Rhi, Juhyung

2006(2008) "Some Textual Parallels for Gandhāran Art: Fasting Buddhas, *Lalitavistara*, and *Karuṇāpuṇḍarīka*," *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 29–1, pp. 125–153.

Terakawa, Shunsho

1969 *The Karuṇāpuṇḍarīka: chapters V and VI*, A dissertation in Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the Requirements for the degree of Doctor of Philosophy.

Yamada, Isshi

1968 *Karuṇāpuṇḍarīka*, vols. I-II. London: School of Oriental and African Studies, University of London.

Weller, Royal W

1969 *The Karuṇāpuṇḍarīka: chapters I and II*, A dissertation in Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the Requirements for the degree of Doctor of Philosophy.

石上和敬

2009「Karuṇāpuṇḍarīka の梵蔵漢資料」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』第25号, pp.

1–42.
2010「〈悲華経〉の先行研究概観」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』第26号，pp. 1–42.
2014「〈悲華経〉の梵文資料――補遺――」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』第30号，pp. 1–21.

岩本裕
1974「悲華経（抄）」『大乗経典　4 』（仏教聖典選 第 6 巻），東京：読売新聞社，pp. 203–340.

宇治谷祐顕
1969『悲華経の研究』名古屋：文光堂.

岡野潔
2021「Kalpalatā と Avadānamālā の研究（10）―― Jayamuni の仕事と TJAM 第15章――」『南アジア古典学』第16号，pp. 51–138.

末木文美士
1998『鎌倉仏教形成論――思想史の立場から――』京都：法藏館.

清水俊史
2017「研究ノート 梵文和訳 Mahajjātakamālā における阿弥陀仏本願・授記」『浄土学』第54輯，pp. 249–261.

長島尚道
1981「阿弥陀仏本願文の変遷――悲華経を中心として――」『時宗教学年報』第 9 輯，pp. 21–36.

成田貞寛
1963「鎌倉期南都諸師の釈迦如来観と利生事業」『佛教大学研究紀要』第44・45号，pp. 175–184.

藤田宏達
2015『新訂 梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』京都：法藏館.

三崎良周
1992『密教と神祇思想』東京：創文社.

（令和 4 年度科学研究費21K19970, 22K12975による研究成果の一部）